

部落史の窓

近世陽明思想の被差別部落民観について

——『続人物でつづる被差別民の歴史』(中尾健次・黒川みどり共著)によせて——

森田 康夫

『続人物でつづる被差別民の歴史』(二〇〇六)を読んで、改めて大塩の乱と渡辺村の関係について述べてみたい。当時としては比較的客観的に書かれていたとはいえ、乱の際の城方与力・坂本鉦之助の書いた『咬菜秘記』だけを鵜呑みにした岡本良一『大塩平八郎』(一九七五)の説は、被差別部落史でも原田伴彦以下なんの疑いもなく踏襲されてきた。岡本は大塩の被差別部落民観を、乱に際して渡辺村の小頭らの遅参を大塩がなじった、という『咬菜秘記』に記された一件から、「平八郎はしばしば部落民の解放を口にしていたようであるが、…(中略)

…部落民の熾烈な解放意欲を利用することによって、彼らのかぎりない献身を期待する封建支配階級の意図から出たところの、まことに狡猾な術策にすぎなかった。その真意に至っては、むしろ解放とはまったく正反対のものであったと解せざるをえないのである」と評価した。ここまで云うと大塩の乱とは一体なんであったのか、ということも問われなければならない。岡本流に云えば、大塩の野望を遂げるために被差別部落民はもとより、門人の農民まで利用して自己の鬱憤を晴らす私憤か狂気ということになり、大塩の乱の歴史的な意義が見失われる。

大塩の乱と被差別部落の関係は、渡辺村との関係だけで考えるのは不十分で、岡本の間違ひもここから始まった。岡本流に云うと、吹田村や般若寺村(現大阪市旭区)などの被差別部落民は大塩の「狡猾な術策」にはまって参加したのであるうか。例えば般若寺村のかわたは日常的に庄屋橋本忠兵衛の陽明学的な仁愛思想にふれ、忠兵衛の呼びかけには一も二もなく参加した。これを狡猾な術策といえば、私達が日常的に取り結ぶ人間関係とは一体何かということになる。

私は、大塩と渡辺村の知識層を中心に共有されていた中国の司馬遷『史記』の樊噲伝に注目し、そこから両者の暗黙の合意を主張した。いま一つは大塩思想そのものにある万物一体の仁の思想で、大塩自身が身分的階層社会の悲哀を感じるなかで、被差別部落民の立場に深い理解を示していたことを挙げてきた。だからこそ命を賭けた乱に際しても信頼できる協力者として被差別部落民を位置づけたのである。その期待に応えられなかったのが渡辺村側であった。

岡本のように一方的に被差別部落民は利用される存在と決めつけることは、被差別部落民は何も考えない、力ある者に指示されればそれに従う心卑しい集団ということになる。大塩に従うことで身分的解放の機会にしようとするのは、被差別部落民にとって悪しき選択なのだろうか。時代は被差別部落民を差別するのは当然とする近世社会のことである。

大塩にとつての聖人の学はすべての人に開かれた学問であった。被差別部落民といえども、政治改革を行う聖人の心を共有することができるとする立場であった。大塩は乱への参加を促すことで政治改革への機会を被差別部落民と共にしようとしたのである。

何よりも大塩思想の根幹である良知を致し心を太虚に帰するためには、先ず身を慎み私欲を断ち正心誠意の人にならねばならないとした。正心誠意の人になるということは、己を偽つてはならないことである。虚言で他者を騙すなどはもつての外の行為であった。私欲のためにする行為は大塩のもつとも憎むところであ

る。被差別部落民を、その熾烈な解放意欲を利用して乱に動員したのであれば、知行合一を説いた大塩の陽明学的思想は成り立たなくなる。村々から被差別部落民が参加した背景には、それぞれの門人から伝えられた何らかのメッセージに対する共鳴があつたはずである。

残念ながら、大塩が被差別部落民に対してどのような解放論を説いていたかは定かではない。しかし大塩が最初に王陽明の著書に接したのが三輪執斎（一六六七―一七四四）の『伝習録』であり『古本大学』であつたことから、執斎のその他の陽明学関係の著書にも目を通したと考えるべきであろう。とりわけ執斎の『四言教講義』は陽明学入門の名著であり、大塩も『四言教』の重要さを承知していた³。これらの経緯から執斎の『四言教講義』を読んだものと考えてよからう。この『四言教講義』のなかに被差別部落民のことが論じられていた。少し長い議論であるが、紹介しよう。

問 しかば、古聖人の説たまへる四書六経は、みな無用の物にて、書は

古人の糟粕など云る論、あたれりとするか。

答 それは道しらぬ人の偏見なり。夫四書六経は皆良知のすがたにて、我心の名目注釈也。六経四書の実是我心に在り。わが心の形象名目は六経四書に在也。故に我本心を失ひたる人は其形象名目を六経四書に尋ねて、己が良知に照し、合せて是を取返さずんば、何によりて其本にかへる事を得むや。我本心を失ふことは人欲の妨故也。故に人欲を去て天理にかへるを学と云ふ。：（中略）：然るに我心の実を失ひて四書六経の文義をのみ見るを道と覚たるは、折紙の目録を太力馬也とをもふにひとし。：（中略）：四書六経の実をよくしぼりととりたるあとは、かすともいふべし。その酒ともの粕と思ひて捨るは異端也。：（中略）：書をよむのみを学といはば、書をよむいとまなき者は、学は一生の内にならぬ事なり。其四書六経の実なる我心にいて修する時は、書をよまぬとき

も、その実我心に在。その心あれば、少の隙をも他に用ひずして、四書六經に考へて間断なかるべし。

四書六經をいくら読んでも、人欲で心の実まことを失つていては、それは学問のしほり粕を読むようなもので真の学問ではない。四書六經を読むだけが学問ではない。それでは書を読む暇のない者は学問ができないことになる。そうではなくて、常に我心に実を失わないようにする努力が肝心である、と執齋は説いた。

問 いへる所の如くなれば、誠に有がたき事に心えはべる。然ども、悪人の聖人となると云、異端邪惡の徒も堯舜となるといへるは、かの煩惱即菩提の類にて、陽儒陰仏の説と聞え侍る。朱学の徒は、仏者などは講席へも入れず、嚴に我道を守に、それも堯舜となるべしといへるは、心得難し。

四書六經を読むだけが学問ではないとしても、人は美の心を取り戻せば悪人・異端邪惡の徒も堯舜のような聖人の域に達するというのは如何なものか、と門人

がさらに尋ねると、執齋は答えた。

答 教は元來悪人愚人異端邪類の為に設けたる者也。如何となれば、賢人君子には教なくても可也。正統の人には説くべき事なし。愚を明かにして異端を正統にするこそ、真の學術なるべけれ。…(中略)…道を聞むと望む者あらば、いかよの愚人悪人異端の邪類にても、随分きかせたきは、我聖門の教なり。是よりの外、穢多乞食の人倫に齡せぬものといへども、捨べきにあらず、これらをも化して、堯舜の民たらしむべし。これををしへ有て類なしと云ふ也。夫穢多乞食も、人を殺し火を放ちて人の物を盗とらむと云心少もおこれば、是即桀紂が心なり。この者として、是を惡也と知たる良知は、堯舜にかはる事なければ、其良知に従て其惡念をひるがへさば、則堯舜の民たるなり。獸の皮を剥、人に食を乞て世をわたるは、彼等が職分也。淵明も乞食せられしとて、賢者たるに害なし。樊噲は屠者より起りて、功

臣たるに異論なければ、是を惡なりとも云ふ可らず。是人皆堯舜となるべきにあらずや。上は人君より下は士庶人、此外穢多乞食にいたるまで、みな人也。…(後略)…^④

聖人の教えは元はといえは、悪人愚人異端邪の類を道に導くための教えで、それが真の学問の姿である。道を求める者には相手が誰であろうが、門を開くのが陽明学である。だから穢多や乞食のように世の中から疎外された者こそ、堯舜の民にしなければならぬ。陽明学は相手によって偏りがあつてはならないのである。だから穢多や乞食が悪を犯せばその心は暴君の心と同じであるが、彼らが良知に目覚めれば堯舜のような聖人とかわることはない。穢多が獸の皮を剥ぎ乞食が人に食を乞うて世をわたるは、士農工商がそれぞれ職分であるように、彼等の職分なのだ。これを惡として決めつけてはならない。陽明学では人は誰でも堯舜のような聖人となることができるのだ。「上は人君より下は士庶人、此外穢多乞食にいたるまで」をみな人というのであ

る。

執齋にとつての人はこのように封建的身分制の枠を超え、社会的生活者を均しく人とした。近世朱子学者のなかで穢多乞食を交えて人としてその社会的存在を受容的に把握した学者はあったのだろうか。朱子学者の多くは穢多の存在をその呼称の通りに、穢れた存在として非人間的な否定的存在としてとらえ、士農工商の身分制度の外側に位置づけていた。しかし執齋は穢多といえども社会的存在として人間社会の一環として位置づけ、士農工商と対等な職分、職能として把握したのである。

いうまでもなくその根底には、天地万物が一体の仁で結びつくとする陽明学的倫理観があった。このような執齋の人間観に大塩も十分に刮目されたであろうところから、大塩と渡辺村とのつながりも考えなければならない。

なぜなら先の『咬菜秘記』でも、大塩が大坂城の警備に関して渡辺村の力に期待したとき、当時の武士層の認識は大塩の行為を「学者に似ぬ心の穢れたる人」

と見たように、武士と穢多との交わりは「卑しい」行為とされてきた。しかし大塩はそのような朱子学的差別観を打破して、すべての人に開かれた聖人の学^{II}陽明学的視点から渡辺村の人々と対し、自分の魂の分身として小頭に短刀まで与えていたのである。大塩のこのような人間観を無視して、大塩と渡辺村との関係を「まことに狡猾な術策にすぎなかった」と批判することは果たして正鵠をえたものであろうか。これまで全く見失われてきた陽明学思想史から、大塩と被差別部落の関係を読み解く必要がある。

註

- (1) 拙稿「大塩平八郎の被差別民観」『大塩研究』五〇号、二〇〇四年三月。
- (2) 司馬遷『史記』樊噲伝は、犬の肉をひさぐ樊噲が漢の武帝を助けて重臣に登用された史伝で、『咬菜秘記』にも渡辺村の人の語った言葉としてあり、『摂津役人村文書』にも関連する記事「一種の社会・抄」がある。

- (3) 『四言教』は『大学』の教えとして大塩の重視したところで、『洗心洞割記』でも中国清代の朱子学者陸稼書・呂晩村らの四言教批判に厳しい反比判(下巻七三条)をしていた。
- (4) 『日本倫理彙編(陽明学派の部・中)』四一八頁。